

大津 歴博 だより

2005
No.58

新収蔵品紹介

近江八景蒔絵香炉台

※解説は6ページ



大津市歴史博物館

西国巡礼札所 — 三井寺(園城寺) —

■ 4月12日(火)〜5月29日(日)

人々を旅にいざなう「巡礼」。中でも西国三十三ヶ所観音巡礼は、古くから人々をひきつける代表的な巡礼です。その成立は定かではありませんが、平安時代後期の園城寺の僧覚忠(承元年間(一一〇七—一一一〇)寂)が、この巡礼を行ったことが記録に見え、園城寺の修験道が影響して成立したのではと考えられています。

市内には、西国札所が三ヶ寺あります。岩間寺(十二番)、石山寺(十三番)そして三井寺(十四番)です。今回は、三井寺に残された巡礼関係の資料を紹介いたします。

札所である観音堂は、正式には正法寺と称し、中世、同寺はもっと山手の高い場所に位置していました。ところが、ある夜の夢に正法寺の僧が現れ、山上にあつては人々が訪れにくく、その上結界の中にあるため女人が参拝することができな



納札 元禄年間(1688~1704) 園城寺蔵

い。人々を広く救済することを願っているので、山を下りたい旨が告げられ、文明十三年(一四八二)現在地に移ったと言われています。現在の建物は、元禄二年(一六八九)に建立され、本尊は、平安時代の木造如意輪観音(秘仏)です。

観音霊場を「札所」と呼ぶのは、巡礼者が参拝の折りに札を納めたことに由来します。札は、木製をはじめ紙、金属のもの等があり、奉納年月日、奉納者の生地と氏名等が記されています。いつ誰が巡礼に来ていたかが分かる貴重な資料です。ほとんどが焼却されたようですが、三井寺には、五〇枚余りの江戸時代の納札が残されています。関東方面の巡礼者が多かったようです。九州や中国地方の地名も見られ、全国各地から巡礼の旅に出ていることがうかがえます。

展示では、このほかにも、三井寺への信仰から奉納された絵馬や、配付されたお札等の版木などの関連する資料を紹介いたします。



三井寺観音堂落慶図絵馬 元禄3年(1690) 園城寺蔵

大津の仏教文化6 寺誌・縁起2

■5月31日(火)〜7月10日(日)

ミニ企画展「大津の仏教文化」シリーズは、当館が開館以来行なっている、大津市内に所在する各寺院の調査結果を踏まえ、そこに伝来する仏教美術等の文化財を展示することにより、その豊かな仏教文化を広く市民に紹介しようとするものです。今回は、大津市内に所在する大寺院の歴史を記す史料や縁起を紹介する「寺誌・縁起」の第二段です。

各寺院には、草創建立に関する縁起や堂舎や仏像について詳しく記した寺誌が多く伝来しています。これらは、古の盛時を伝え、特に現在失われた仏像の記述は、かつての安置状況などを復元できる貴重な情報として注目されます。また、聖教の奥書などには、寺院の復興の様子や、寺僧の法系の関連を示すものも多く、寺院の歴史を知る上では重要な史料といえます。

本展では、寺誌を代表する著名な史料とあわせて、今まであまり紹介される事のなかった史料や聖教、絵図を展示いたします。

西教寺の正教蔵

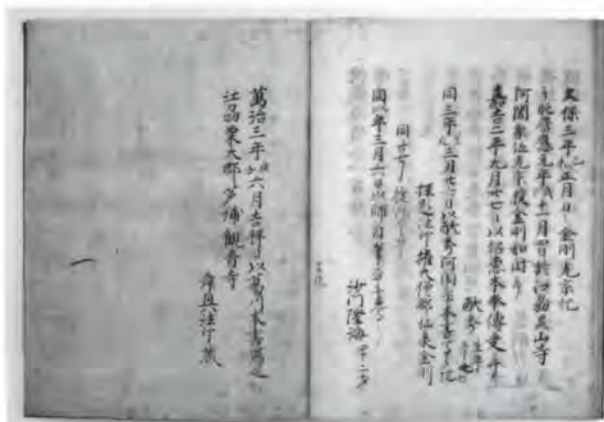
比叡山の麓、坂本に所在する天台真盛宗総本山西教



正教蔵函 西教寺蔵

寺には、京都・法勝寺伝来の「細編」や「方丈文庫」、そして「正教蔵」など多くの古文書、聖教類が伝来しています。特に「正教蔵」は、南光坊天海による「天海蔵」（叡山文庫の「叡山天海蔵」と日光輪王寺の「日光天海蔵」）や、実俊などによる東塔南谷の「真如蔵」と並んで、戦乱後の比叡山復興に伴い、教学の充実を図るために蒐集書写された天台史料群の代表的なものの一つとして著名なものです。正教蔵の箱書や奥書には、「苕浦観音寺舜興蔵」などとあり、苕浦観音寺（草津市）の舜興が所蔵したものと分かります。伝来の経緯は、比叡山焼打時に、比叡山西塔北谷の正教坊住持である詮舜が、兄の賢珍のいる苕浦観音寺に避難し、後に観音寺住持となり、比叡山復興のために尽力しました。その法資にあたる舜興は、元和二年（一六一六）に正教坊を継ぎ、その後観音寺に移り、詮舜以来の悲願であった聖教の充実を達成したのでした。正教蔵は後に、法系である正教坊に移され、西塔の貴重な聖教として重要視されましたが、明治八年（一八七五）西教寺に二百七箱が寄進され、現在は西教寺文庫に保管されています。

今回の展示では、これら天台の代表的な史料群の一つ、正教蔵についても紹介する予定です。

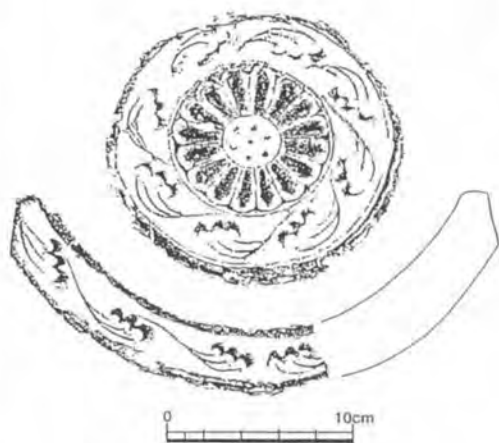


正教蔵「溪嵐拾葉集縁起」奥書 西教寺蔵

企画展「近江の国府と郡衙」から

現在、企画展「近江の国府と郡衙——発掘された古代の役所——」（2月26日～4月17日まで）を開催しています。多くの役所に関する遺物を展示していますが、展示資料の一部について解説・紹介したいと思います。

飛雲文



惣山遺跡 軒瓦 大津市教育委員会蔵

飛雲文は、近江国府の特徴的な文様で、軒瓦、鬼瓦の文様として使われています。近江国庁跡を初めとして、堂ノ上遺跡、惣山遺

跡、青江遺跡、瀬田廃寺などで出土しています。

軒瓦の製作については、文様を彫った範と呼ばれるものを用いて文様をつけます。国府関係の各遺跡で出土する軒丸瓦は同じ範を使って作られていることが確認されており、各遺跡に瓦を供給する窯があり、同じ時期に各施設が作られたと考える根拠の一つになっています。また、範が割れていたりすることなどから、同じ範を繰り返し使っていたこともわかります。

軒平瓦に関しては、国府関係の遺跡以外では近江で唯一、高島郡の日置前廃寺から出土しています。文様構成が国府関係の遺跡とは異なりますが、つくりは丁寧に作られています。

墨書土器 鴨遺跡出土

鴨遺跡では緑釉陶器や灰釉陶器のほかに多くの墨書土器（土器の器面に墨で文字などが書かれている）が出土しています。墨書の内容は、「廣津」「廣津弥」「大領」「主」「主政」「今東」など多くの種類が見られます。

郡司の役職は、大領・少領・主政・主帳の四等官がありました。「大領」や「主政」はその役職名にあたります。

鴨遺跡が高島郡衙にあたるのかどうかは現在も多くの説が出されていますが、これらの墨書土器がそれを考える一つの材料になります。



鴨遺跡 墨書土器 高島歴史民俗資料館蔵

帯具 井口遺跡出土

井口遺跡出土の帯具はおそらく九世紀頃のものと考えられ、軟玉で作られています。3.7センチ

×37センチの表面に動物のレリーフが彫られており、県内はもとより全国的に見ても珍しいものです。この地域の古代の有力者が住んでいたのでしょうか。



井口遺跡 帯具 滋賀県教育委員会蔵

ところで、井口遺跡のある伊香郡の郡衙の所在地はまだ分かっていません。井口遺跡でも大きな柱を持つ建物跡が見つかりますが、郡衙と決定づけるものは出土していません。しかし、今後の調査を待たなければなりません。郡衙の位置を考える際の手掛かりとなる遺物の一つです。

この他、県内の各地で帯具が出土しています。郡衙とされる遺跡での出土もありますが、そうではない遺跡からも出土しており、郡衙や役人の様子について考える手掛かりにもなります。

銅匙 竹ヶ鼻廃寺出土

竹ヶ鼻廃寺は、発掘調査によって多くの掘立柱建物跡が検出されている遺跡です。寺院跡としての伽藍配置などは明らかではなく、多くの掘立柱建物跡の状況から、郡衙に関わる施設、とくに倉庫群とも考えられています。

この銅匙は、井戸枠の掘形（井戸枠を据えるために掘った大きな穴）から出土しています。

正倉院に同じ形のものが残っており、同時代のものと考えられます。柄の曲線や木の葉形の匙部など丁寧な作りがみられます。



竹ヶ鼻廃寺 銅匙 彦根市教育委員会蔵

土馬

土馬は古代の祭祀に使われた遺物と考えられています。ほとんど完形で出土することはなく、足が折れていたり胴体が割れています。今回の企画展で展示している、野畑遺跡・岡遺跡・手原遺跡・関津遺跡のものも全てそうなっています。なぜ、破損しているのか、おそらくまじないに使うときに意図的に割っているのだろうと考えられています。ただ、どのよう内容のまじないなのか、なぜ割るのか、などは分かっていません。

今回の企画展では、この他にも多くの特殊な遺物を展示しています。国府や郡衙といった古代の役所での役人の仕事や暮らしの様子、そして一般集落とは異なる様子を見ることが出来ます。



関津遺跡 土馬 滋賀県教育委員会蔵

収蔵品紹介

49

近江八景蒔絵香炉台まきえこうろくだい

一九世紀

一基 本館蔵

きらめく蒔絵で近江八景が描かれた団扇から、三つ足のびて、まるで虫がたたずんでいるようです。よく見ると、足には竹の節があります。いったいこれは何の道具なんだろうと思わせる不思議な形の工芸品です。実は、これは香炉台です。御香を焚く香炉を載せる台なのです。主に床の間の中央に飾られる台であり、螺鈿や堆朱といった漆工芸品や、紫檀の木製調度など中国風のものが多くみられます。対して、本作は、近江八景という意匠を、蒔絵の技法で表した和様の香炉台です。三つ足が竹の形状をしており、天板が団扇形



ということもあり、異彩を放つ香炉台となっています。

床の間に置く場合、柄と房を手前に向けるのが正面なのか、側面を向けるのが正面の置き方なのかも不明です。さらに、本作は香炉台ですが、肝心の香炉を天板に置くと、せっかくの近江八景の蒔絵が台無しになってしまうと思われるかもしれません。しかし、あえてそこに香炉を置き、床に飾って愛でることは、なんとも贅沢な楽しみといえます。

ちなみに、三つ足は、実際の竹を曲げたものではありません。竹の形状に加工した材に漆を塗り、一見竹と見間違えてしまうような擬竹としています。

なお、近江八景の意匠の構成は、比良、石山、三井の山が、膳所城、浮御堂、唐橋、および唐崎の松を囲む構図となっており、本館蔵の刺繍近江八景袱紗（一九世紀、右写真）



との共通点が多くみられます。ちなみに、鳥居清満（初代）（一八世紀）の近江八景図もこれに近いものがあります。一面面に八景を凝縮する場合、瀬田唐橋などは中央を飾り、石山秋月などは周囲に配置されるなど、どうやら構図のパターンがあるようです。

（横谷 賢一郎）

大津歴博だより No.58
平成17年3月30日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

100